

中村哲医師アーカイブ

※「沖縄タイムス」連載「ペシャワールから沖縄」第15回（二〇〇四年八月一九日）より

## 人は自然に守られている——思い上がる人間 中村哲

チームワークに難儀するのはどこも同じである。

あるとき、日本人ワーカーの一人が用水路作業現場でけがをした。金づちで左指をしたたかに打ち、挫滅創<sup>ざつめつそう</sup>でひどい痛みを患った。昼食時にみんなが心配して、あれやこれや治療法を述べた。「患部を洗って水で冷やせ」と私が示唆したのに、現地の者がそれぞれに異なる意見を言う。議論百出。「アルコールをかけよ」「温めるべきだ」、くらいならまだいいが、「煮えたぎったやかんに指をつける」に至っては、さすがに医師でもある私は黙っておれない。

しかし、さもありなん。工事現場では汚い作業服を着て、ガツガツと食事をしていいる私が医師であることを、現地人もワーカーも忘れていたのである。血流をよくするため手を高くし、小骨折や腱<sup>けん</sup>の断裂が疑われれば、ギプスで固定するのが常道だ。このときばかりは「わしは医者だぞ」と強調せざるを得なかった。

ところが、このワーカーも一徹者。「作業中はせめて三角巾で腕をつれ」と指示すれ

ば、答えていわく「作業しにくいし、たかがこれくらいでおおげさに思われる」。「男の見えをとるか、治療をとるか」と問えば、「見えをとります」ときっぱりと述べた。立派である。

日本の病院では対照的で、放置すれば治るようなけがでも、心配して来院するのが普通になってしまい、診察中、「これくらいで病院にくるな」と内心思うことが一度ならずある。そんなせりふをはけば、患者も傷つくし、病院の評判も悪くなるので黙っている。

さて、考えればアフガニスタンの至る所が「無医地区」である。小さなけがや軽い病気なら医者にこない（行くカネがない）。民間療法や祈禱<sup>きとう</sup>師、自己流の治療法で対処する。腸チフスや悪性マラリアなどの重症例は別として、軽い病気なら、安静にさえすれば、何をやっても治るのである。もちろん、長い間に「こうすれば治りやすい、ああすればかえって悪くなる」という経験が蓄積して、医学治療が進歩し、民間治療がいきわたる。



現場にて食事の中村医師（2009年4月25日）

しかし、えてして人間は自分の行為で治ったと信じがちである。これは世界中、変わらない。告白すれば、実は医者の世界でもそうで、はたして薬が効いたのか、放置しても治ったのか分からないことが案外少なくない。技術的には、基本をきちんと守り、多少のさじ加減をその人に応じて加えれば、治るものは治り、治らないものは治らない。ただ、正しい診断さえあれば見通しが予測でき、患者の不安を鎮めることができるのみである。臨床経験が豊富な医師なら、分かるはずである。

だが、医師の少ない現地では、これまた

\*表紙写真によせて\*

## 荒涼たる大地で祈りを捧げる

祈りの瞬きに人は何を想うのだろうか。静寂が支配する夜明け前の4時頃、お祈りの時間を知らせるアザーンが町中に響き渡り、彼らの一日が始まる。イスラム教のしきたりでは、日の出前を含む一日に5回の礼拝が定められており、メッカの方角を向き、決まった所作に従ってお祈りを捧げる。

祈り—その起源はもはや定かではなく、宗教により異なる慣習が確立されている。それでも、いつからだろう。祈り—その一連の所作は等しく美しい、そして尊ぶべきものだと感じるようになったのは。いつからだろう。その行為には他者を慈しむ心が内在されていると気づきはじめてのは。

今日も、子どもたちの美しい讃美歌が響き渡る教会で、あるいは爆発音が轟く燃えさかる町の片隅で、誰かが誰かを想い祈りを捧げる。切なる祈りは過去、未来、運命さえも超え大切な人のもとへ届き、ほのかに心を温める。

極端。一人ひとりが自分の経験に自信をもつ。その自信が日本人の一般常識からみて尋常ではないのだ。一匹狼の集合だと考えて差し支えない。私は神経が専門だが、赴任の初期、部下の看護師が神経の解剖と機能をたっぷりと講義してくれた。「釈迦に説法、それくらいは知っている」と言いたかったが、診療意欲をそがぬよう黙って聞いた。これにはかなりの忍耐が要る。

この一匹狼の群れを束ねるのは容易ではない。一番の解決法は、ことを起こすときに指導者たる本人が先頭に立ち、実績で語ることである。いわば遊牧民的な気風で、マニュアル式の組織的な集団は現地向きではない。

話がそれだが、私がいつも思うのは、人

は本当は備えられた自然に守られている事に気付かず、自分の意図でことが成ると錯覚しがちである。その極致が「バベルの塔」の物語として旧約聖書に描かれている。神を忘れて思いついた人間が天に届くと巨大な塔を築き上げようとしたとき、神はこれを破壊して滅ぼされた。今、作業現場の上空を舞う米軍ヘリを見、「民主主義」「近代化」ですべて幸せがくるかのごとき喧騒と錯覚を眺めるにつけ、なぜかこの物語を思い出す。

グローバルゼーションという名の、世界を支配する人為と欲望の巨大な組織化に比べれば、現地の人間の「過剰な自信」と「チームワークのなさ」が、何やらかわいらしく思えて仕方なかった。

## PMSの動き

- 8月12日～11月4日 カシマバード堰の補修工事
- 8月17日～10月6日 PMS 支援室員がジャララバード事務所に滞在
- 9月27日～10月17日 27日夜半、マルワリード用水路 H、N 地区で豪雨による鉄砲水が発生。用水路内に大量の土砂が流入し浚渫を行なった。
- 10月1日～10月10日 ガンベリ農場で稲刈り
- 10月7日 カマI堰補修工事を開始
- 11月4日 ミラーン堰補修工事を開始

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

\*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手はお受けしておりません。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

\*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

\*会費、寄付をご入金される際は、払込用紙の受領ハガキ欄の「要・不要」のどちらかに○印をお願いします。